自然の中で
野外教育情報
2019 第10号
◆今号の特集◆
「下 見」
令和元年7月15日発行
公益財団法人 日本教育科学研究所

実踏(下見)がリスクベネフィットを作る

二宮 孝（ヤガイカツダー・LOHAS調理師）

キャンプなどで参加者の自由度を増やすための下見、予定調和を作るための下見、自分のモチベーションや方向性を広げる下見…いずれにしてもプログラムデザイン自体は楽しいことだ。毎年の下見もあるけど、初めての場所への実地踏査は格別だ。現地の人や言葉（方言）、気候・歴史・文化、特に食。

岩手県山形村（現久慈市山形町）への実地踏査は格別だった。空気感が違っていた。道路を牛が移動していた。ハンサムが多かった。雑穀文化に起因するのか、食が興味深かった。「やませ」が吹いて夏でも肌寒い。小麦粉やイナキビを上手に使う。豆腐が都会で売ってるものの3丁分ぐらいあってしっかり固い、もちろん旨い。「そば（繋ぎが豆腐）」「まめぶ」や「ひっつみ汁」、あるいは「八杯豆腐」や「ほど餅」「あんずきばっとう」も美味い。クマもたくさんいるし、アブも蛾も多い。

ここで子どもたちのキャンプをすることになった。バックには村役場がついて万全の体制。初年度のキッチンは地元食材と調理法を知り尽くした知る人ぞ知る《梅さん》。なぜかまだそのころは大量調理をしなかった僕が7日間全食メモを取っていた。数年後キッチン担当適任者がいなくて考えた…そのころには別な理由から《調理師資格》を取得していたもんだから、過去のメモ書きを引っ張り出して請け負うことにした。

グラスフェッドビーフ（牧草で育てた牛）の中でも国内最高級の赤身で有名な総合農舎の岩手短角牛。折爪岳のふもとで特別に育てた三元豚の佐助豚。これらを使って「スローフード・スローライフ」をテーマに、子どもたちとキャンプを行っている。

ベジタリアンデー（肉と魚は供さない）を設けたり、サマータイムを導入したり、遠征と称して2日がかりで遠島山に登山をしたりして、グループ作りのプロセスに取り組んでもらう。キャンプ場に「内間木洞」という鍾乳洞があり、使いたい時に使わせてもらっている。

すべては最初の実地踏査から始まっている。現地スタッフに毎年あるいは寸前の下見は頼んでいるが、数年毎に実踏に行く。発見もあるしアイディアも湧く。リスクは絶えない。ゆえに「リスクベネフィット」に転換している。実踏あったからこその英断もある。

● 1955年生まれ、東京都新宿区出身、NPO体験学習研究会所属、登山ガイド・SIA正会員

遊びと言われようが下見は大事

中村 昭彦

年に数回から数十回、初めてのフィールドにでかけます。通称『下見』。『下見』と言っておけば、たとえそれが遊びに行っていたとしても、対外的には仕事をしているような言い訳が立ちますし、家庭内も円満です。

『下見』の重要なポイントはなんでしょうか。それは間違いなく仕事につなげることができるかどうかだと思います。私の仕事はガイドですので、依頼があったゲストの方からガイド料という名目でお金をいただきます。

では、どうしたらお金をいただけるような『下見』ができるのでしょうか。正解はわかりませんが、私が意識していることを書いてみます。

まず1つ目は、純粋にフィールドを見る、ということです。そこには対象のゲストやギアの設定は入れません。外的な設定を入れてしまうと、その設定に合わせようとしながらフィールドを見てしまいます。

例えば、スノーシューの半日初心者コースを探しに行こうとした場合、歩いて半日で行ける距離しか行動しないでしょう。滑走に気持ちよさそうな、北向きのオープンな急斜面は下見から外されるかもしれません。そうなった時点でそのフィールドの可能性を自分から減らしてしまっています。

だから、『下見』はフィールドをウロウロ歩いたりキョロキョロ見渡したりしながら、可能な限り動き回ります。そうすれば、その時の天気や雪の状態により、危険箇所を避けてゲストが楽しめる場所を考慮して、より良いコースにお連れすることが可能になるはずです。

両側に崖が迫る川下り

カヤックでの川下りをするときは、色々なサイトからその川の情報を事前に入手し、『下見』に行きます。情報は川の流れに関するものが多数を占めていて、もちろんそれは有益であり助かりますが、私は常に川の周りを見るようにしています。水の流れは水量によって常に変わりますが、周りの地形はよほどのことがない限り変わりません。川はその場所のいちばん低いところを流れますから、何かあったら必ず上に登らないといけません。このことは安全面でも非常に重要なことです。

2つ目は、そのフィールド周辺の観光名所やおすすめポイントも押さえておく、ということです。

『下見』によっていいフィールドを見つけても、仕事を実際にする日がいい条件であるとは限りません。多くのルートを持っている場所であれば、その必要はありませんが、すべてのルートが選択できなかった場合は、気持ちを切り替えておいしいグルメと温泉に行きましょう。よって、『下見』にはアフターの時間も重要です。

最後に、いちばん大事な要素ですが、その『下見』が楽しかったかどうか、ということです。

仕事にするためには、ゲストに対して、如何にそのフィールドに合った良いプレゼンをし、ガイドの依頼をしていただくかが重要です。自分が楽しくなかったら、きっとゲストの方にも楽しさが伝わらないでしょう。

『下見』ってガイドには必要不可欠な仕事です。だから、私は『下見』をやめません。

● 中村 昭彦［なかむら あきひこ］
一滴 Paddle & Mountain Guide 代表
1976年生まれ。長野県の野尻湖畔をベースに、全国各地で水を絡めたプライベートスタイルの外遊びを展開している。

“見えない下見”の世界

小林幸一郎

目が見えていない私が下見をどのようにしているのか、と寄稿のご依頼を頂き改めて考えてみました。

今、私には下見と言う行為が必要となる場面が、大別して二つあります。

ひとつは、NPO法人が開催するクライミングの体験会や教室などイベントを行う際の会場下見。

そしてもう一つは、自らが壁や岩を登る時。

中でも大会など競技の場面における下見はオブザベーションとも呼ばれ、その結果を左右する極めて重要なものとなります。

しかし、目が見えないのに「下見」？

んー、確かにあまりしっくりこない表現かもしれないですねえ。

それでは実際にどうしているのかと言うと、必ず必要となっているのが自分の目の代わりを果たしてくれるパートナーの存在です。

イベント会場となることの多いクライミングジムなどの下見では、まずどこかを起点として、会場の建物の構造、壁のつくり、ホールドの付けられ方、どの程度の難易度の課題があるのかの見立てなど、大きなことから小さいことへと、順に情報を聞き出していきます。

さらに、出来るだけ手や杖を使い触れて回ったり、受け身でい続けないことに留意しながら、頭の中でイメージをしてゆく作業をします。

そして、初見でどの高さまで登ることが出来るのかを競うパラクライミング競技大会に出場する時には、１５ｍほどの高さの壁に３０～４０個ほどのホールドが配置されルートが設定されているので、まず壁の作りと傾斜、直上なのか左上なのかなど大まかなライン、そして取り付けられているホールドの方向・距離・形状の配置と、そこからイメージした登り方を全て記憶していきます。

そうなんです。イベント運営にせよ大会にせよ、記憶の中で生きる人々とも揶揄されることもある視覚障害者の下見においては、やはり、いきつくところは記憶する努力だと思っています。

しかし、多岐にわたる情報収集をたった一度で行わなければならない「下見」において、記憶をすることは視覚障害者だけに求められていることではないと思います。

ひとつでも多い必要な情報を見つけ出すこと、目の代わりを務めてくれるパートナーからの情報のみならず自ら聞き出して得る情報、それらを漏らすことなく持ち帰り自らのものとする努力。

俯瞰をし予測を立て記憶をすること、下見においては、視覚障害があるかないかの如何を問わずその本質は変わらないのではないでしょうか。

いきつくところは記憶する努力

私現在51歳、現役で世界選手権３連覇中なんですが、肉体の変化だけでなく年々記憶って難しくなるんですねぇ、日々実感しながらもどう成長し続けるのかも模索し続けています。

（往生際が悪いでしょうか？？）

● 小林 幸一郎 ［こばやし こういちろう］
ＮＰＯ法人モンキーマジック代表理事

1968年東京生まれ、16歳でクライミングに出会い、28歳で進行性眼病を発症、37歳より障害者クライミング普及活動を行うＮＰＯ法人モンキーマジック代表理事。

地元との関係づくり

渡邉 仁

地元（活動地域）の人たちとの関係づくりに、特効薬や近道はありません。住居地から遠く離れた「南会津」という地で、10年近く教育キャンプを実践してきた偽りのない感想です。年間でのべ1ヶ月以上足繁く通い活動をしていますが、いまだに地元との関係づくりの妙技は分かりません。

ただ、現在では、地元の方は、私たちの活動を理解し支援をしてくださいます。そして、その地元に受け入れられているという実感もあります。ここでは、結果的に「地元との関係づくり」に繋がったことを事例的に紹介いたします。

【よそ者として】

まず、初期の段階、自分が「よそ者（外部者）」であるという自覚を持っていました。当時、向こう何十年にわたり、この地で活動をしていく覚悟をしていたとはいえ、移住するわけではありません。だからこそ、その自然環境を守り続けている地元住民へ、「敬意」と「感謝」を表さずにはいられませんでした。何をするにも「おじゃまします」の気持ちから、地元区長や関係者に頻繁に顔を出していました（今でもそうですが）。おそらく当時、地元の方は、「また来て何かやっているなぁ」という印象だったかもしれません。次第に、私たちの素性を理解される中で、有益な情報やアドバイスをくださるようになりました。

【状況が見えてくる】

春夏秋冬を通して数年活動を続けると、色々見えてきます。

鴫沼から望む（南会津町針生区）

フィールドに明るくなると、地元の方との共通の話題が増え、奥深く立ち入った私たちが得た情報をお伝えすることもあります。地元の自然環境を話題にすると、とても喜ばれて会話が弾みます。さらに、面白い情報やネットワークに繋がることもあります。

また、地元の「人」も、多様であることに気がつきます。先祖代々の居住者もいれば、新参の方もいます。よそ者に好意的な方もいれば、そうではない方もいます。高齢の方が多いですが、若人もいます。そして、「人」が絡む、様々な地元問題などを知る機会も増えてきます。地元の自然に詳しくなるに留まらず、地元の人間関係や抱えている課題など、図らずとも見えてきます。しかし、種々の地元話に聞き入りますが、「よそ者」である以上、ニュートラルな態度を堅持し、無責任な言動や行動を慎むようにしています。

【故郷に思える】

今、私自身は「よそ者」である自覚を持ちつつも、この地元が「もう一つの故郷」の感覚にあります。そう思えるのは、地元催事に参加したり、間伐作業や林道整備に協力したり、敢えて地元の方に頼ったりして、「酸いも甘いも」経験してきたからだと感じています。このプロセスがなければ、心から「南会津」に魅かれることはなかったことでしょう。地元の方はこの思いを受け止めてくださっているのだと勝手に思い込んでいます。

「地元との関係づくり」に小手先はありません。まずは、己の心の中に、その地元への「愛情」をじっくり育むことではないかと感じています。

● 渡邉 仁［わたなべ ひとし］
筑波大学体育系 助教

1976年岐阜県生まれ。木曽御嶽の先達だった祖父の影響から、自然と人に関心を持ち、大学・大学院で野外教育を学ぶ。2011年より現職。つくばと南会津を活動拠点とする野外教育団体「TOEL」代表、日本野外教育学会理事ほか。

リスクマネジメントの視点

様々な状況を想像する

原田 順一

事業の前に、必ず行うことに、下見があります。

初めて使用する場所はもちろんですが、毎年使用している場所も、状況が変わっていることもあるので、下見は欠かせないリスクマネジメントの一つになります。

今回は、キャンプ場などの施設や、山や海などのフィールドを初めて使用する際の、下見における、リスクマネジメントの視点について書いてみます。

下見は、なぜするのかと言うと、もちろん参加者や指導者を事故やケガから守るためにします。また、活動がスムーズに進行するために、色々とチェックするものです。当然のことながら、肝心の参加者は、下見の際は、その場にはいません。

と、言うことは、下見をする私たちは、2つの視点を持たなければなりません。

1つ目の視点は「初心者（参加者）の目線」です。下見をする私たちは、経験からの慣れがありますので、初心者が気にする感覚や、気持ちに鈍感になりがちです。例えば、細い山道や、高さのある崖、足元が不安定な場所など、指導者目線で物事を考えないようにすることが必要です。

2つ目の視点は、想像をするということです。それも、出来るだけ多くの状況、細部にわたるまで、考えつく状況を想像し、洗い出すことです。

私の場合は、まず最悪の状況を想像します。最悪の状況とは、事故です。参加者はその場でどの様な行動をとるのか、または、とりそうか。天気が崩れた場合はどうなりそうか、人が多い時はどうなりそうか、前日のプログラムとの兼ね合いなど、全てを想像します。

そして、下見チェックシートに反映し、次の下見に活かします。また、必要な備品や、タイムスケジュール、指導者人数が決まってきます。想像したその結果、場所や参加者対象を変更したり、事前連絡の内容が変わったりすることもあります。

こうして、リスクのあることや場所を排除していき、プログラムが出来上がっていくのだと思います。

楽しく安全な活動には、十分な下見が必要

あくまでも想像なので、それでも参加者は予期せぬ行動をとるかもしれない。という考えは忘れてはいけない事だと思います。

しかし、経験の浅い指導者は、想像しにしくいと思います。想像のほとんどは、経験からくるものですから、なかなか難しいことだと思います。では、どうしたらよいのでしょうか？

やはり、経験のある指導者に共に下見にいってもらうことがベストだと思います。もしくは、その場所を管理している行政や、現地の指導者、地域の方々に聞くことで、想像の不足部分を補ってくれることもあると思います。そして、その想像を、他の指導者と共有することが必ず必要です。

これからのシーズン、下見の機会が多くなると思います。想像力を働かせ、数多くのリスクを事前に把握し、参加者やスタッフが安全に活動できるシーズンになることを願っています。

● 原田 順一［はらだ じゅんいち］
NPO法人湘南自然学校 リスクマネジャー

1978年生まれ。子どもたち対象の自然体験活動を企画運営しています。また、人材養成を担当。ネットワークを通じて、自然体験活動をより社会に発信するつながりや、その仕組みづくりの構築を目指しています。

JAPAN OUTDOOR LEADERS AWARD 2019（JOLA）優秀賞受賞

わんぱくキッズと山に行こう

佐々木 裕子

私が働く愛川ふれあいの村では、年間を通じて主催事業を行っていますが、この春、私は初めて子どもキャンプのディレクターを務めることになりました。小学4～6年生を対象とした1泊2日のキャンプで、私の好きな登山をメインプログラムにしようと思いました。

施設の西側に連なる高取山（706m）と仏果山（747m）の2山縦走登山へのチャレンジです。

しかし、私自身子どもを引率しての登山経験はあまりありません。たくさん山に登って、不安を取り除くしかないと考えました。まずは一人で登ってみます。いつも誰かと登山をし、どちらかというと、ついていく立場が多かった私は、一人で歩いていると少し不安になってきます。「山頂はまだだろうか…」「ゴールはまだだろうか…」、その分足取りも速くなります。

気付くと、5時間をかける予定のコースを半分の時間で歩ききってしまいました。道のりは把握できたけれど、これじゃあ子どもと登山するための下見にならないじゃん！

次に登るときは、ペース配分と危険個所の確認にもっと気を配らなければと反省しました。

キャンプ直前には、スタッフとして入る職員全員で下見登山をする機会を設けました。これまでの反省を生かして、下見の目標設定をします。

・ コースタイム→そもそもの設定に無理はないか？

登山では危険個所とペース配分に気をつける

・ 道のり→危険個所はあるか？・

・休憩ポイント→机やベンチの数、場所、立ち止まれるスペースの確認。

・ 無線は入るか、電波状況はどうか。

下見で何を見るべきかをあげてみると、大切なことがたくさんあると気付きます。スタッフ同士でさまざまな確認をして、下見登山を終えました。

そして、登山本番。朝早く起きて食堂でしっかりご飯を食べて出発！という計画でしたが、出発前の時間が押していく、おしていく。準備に時間がかかり、30分遅れの出発となりました。

「よし、ここからペースを上げて山頂を目指すぞ！」と思ったのも束の間、ペースが上がらない、あがらない。「とにかく声をかけて、ペースが落ちないように引っ張っていこう！」と無線の声が飛び交います。スタッフ全員での下見登山のときに、適切なペースをもっと体感・共有できていればよかったなぁと思いました。

盲点だったのは、当日の荷物の重さ。水分補給バックアップ用の水など、下見の時よりスタッフの荷物はかなり重くなっていました。大人も荷物が重ければ歩くペースは上がりません。私は、がんばってもこれ以上ペースが上がらないというもどかしさに直面しました。子どもたちに後れを取ることはありませんでしたが、少し焦りました。

このように予定通りとはいかないこともありましたが、登山は無事終わりました。この経験から私はよりよい下見をするための新しい基準を手に入れた気がします。子どもたちによい体験を安全に提供するために、まだまだがんばらなければ…。

● 佐々木 裕子［ささき ゆうこ］
神奈川県立愛川ふれあいの村

1994年神奈川県生まれ。学生時代に出会った子どもとのキャンプ活動を機に、野外教育分野に興味を持つようになる。NPO法人国際自然大学校指導者養成校を経て、2018年から神奈川県立愛川ふれあいの村で働く。

想いを形にするのは「人」

石川 裕光

私が管理する「おにし青少年野外活動センター」は、昭和57年４月に、地元鬼石町（合併して現在は藤岡市）が土地を提供、群馬県教育委員会が施設を建設し町に管理を委託するという形でスタートしました。

私は、平成10年に現場職員として町に採用され野外活動センターに勤務しましたが、平成18年３月末、開所から24年で県立施設としては廃止されることが決まりました。

施設を継続して運営するためにＮＰＯ法人を設立、県との契約のもと独立採算制の運営で現在に至っています。

吸収合併に伴う町名の消滅の為、施設の名称が地元町名から付けられたことを、ぜひ知っておいていただきたいと思います。

さて、野外活動を行う上で“どこで行うか”はとても重要なポイントになります。当然利用する場所にどんな施設（設備）があるかは言うまでもありませんが、どんな人が管理に携わっているかも、とても重要ではないかと私は考えています。

下見の際には、ハード面だけでなく、どんな支援が受けられるのかも知っておいてください。

そのためにも、管理する側には、キャンパーについて、スタッフについて、キャンプに傾ける“想い”などの情報を伝えることで、施設も一緒にキャンプをつくるようなアドバイスが得られるのではないかと考えています。

ある日、下見に来ていたキャンプのスタッフに施設を案内していた時のこと、彼が「もうちょっと小さなものが欲しいな」とつぶやきました。
すかさず私は「どうして？」と聞いてみると、「グループの人数が少ないので、このサイズだと難易度が低くなってしまう」と話してくれました。でも、どうしてもその活動を取り入れたいので「このままでも予定します。」と言って帰っていきました。彼が帰った後、材料と道具を用意し、要望通りのサイズの道具を自作しておきました。

キャンプ当日、大きなサイズの道具の隣に小さなサイズの物をさりげなく置いておきました。

当然、彼が喜んでその道具を使ってくれたことは言うまでもありませんし、あとからお礼を言いに来てくれた時は、互いに幸せな気持ちになったことを記憶しています。

施設は利用者と共に成長していくものだと私は考えています。今ある物だけを提供するのではなく、利用する人が求めるものを受け止め、精査し、限られた資金のやり繰りから、取り入れられる物から取り入れていくべきだと思います。

より良いプログラムを実施するため、沢山の施設を下見してください。出来れば実施1年前の同時期に現地を見ておくと当日がイメージしやすいですし、実際に利用している様子を見ることもできるかもしれません。そこからまた新たな発想が生まれるでしょう。

● 石川 裕光［いしかわ ひろみつ］
NPO法人青少年体験活動研究所 代表

1965年群馬県生まれ。民間会社を経て、群馬県の青少年施設に25年間勤務。長期キャンプなどの企画に関わる。2006年から、おにし青少年野外活動センター所長

湖を眼下に見下ろす！

7年を経て振り返ってみる

西島 大祐

私が『アウトドア指導法講習会』で講師をさせていただいたのは、もうかれこれ7年前のことになります。2012（平成24）年10月6日（土）～8日（祝）に群馬県の国立赤城青少年交流の家で実施された当時の講習会には、51名の参加者がいらっしゃいました。講師やスタッフと参加者の関係がとても良く、とにかく明るい雰囲気だったことを懐かしく覚えています。また、心地よい日差しに恵まれた楽しい3日間だったと記憶しています。

年月を経た今、改めてこの講習会を振り返ってみると、この講習会がアウトドアで行われる体験活動の指導法について実践的に学ぶことのできる、貴重な場であったことを思い出します。参加者に求められることはアウトドア生活の技術や経験というよりも、「自然と人」や「人と人」との結びつきを重視し、実践することにありました。

私がこの講習会に関わって特に良かったと思うことは、当時出会った講師やスタッフ、参加者の方々と今でも度々情報交換をしたり、実際の指導の場で指導者仲間としてお会いすることがあるということです。人と人が繋がり続け、刺激しあうことで、もともとある力がさらに大きくなっていくのだと、今更ながら身をもって感じています。

この講習会も今年で33回目を迎えます。まだ参加したことがない方々に、私が感じたこの講習会の魅力を三つほどご紹介させていただきます。

一つ目は、この講習会には先ほど私が述べたような、多くの人との出会いがあります。参加される方々には講師陣やスタッフと直接話をする機会が多くありますし、参加者同士で交流する時間も豊富にあります。また、この講習会ではグループワークを通してアクティビティを創作する時間も設けられており、参加者同士で議論を深めることもできます。アウトドア指導者という同じ志を持った仲間と出会えることが、きっと皆さんにとっての大きな宝になるのではないかと思います。

二つ目は、IOREシートというオリジナル教材の存在です。一つひとつのアクティビティがシートにまとめられていることで、後々の指導の場で活用することができます。新しいアクティビティがシートとして増えていくことも魅力です。

三つ目は、指導者としての感性を育む機会がこの講習会の中に溢れていることです。この講習会は自ら考え学ぶ機会が多く、恵まれた環境の中で、自身の持つ力を高めていただければと思います。

さて、7年前の講習会の後ですが、当時発行された『野外教育情報』の中で、私なりの「野外教育の魅力」を述べさせていただきました。そこでは私が指導者として大切にしていることとして「流行（Trend）」、「情熱（Passion」、「独創性（Originality）」の三つを挙げているのですが、これらの頭文字から勝手に「TPO」と呼んでいました。今となっても勝手なことを申しているなと自嘲を覚えますが、ただ当時の講習会で感じていた思いは変わっておらず、私は今でもこの「TPO」をアウトドア指導者として大切にしています。

この講習会に参加することによって、皆さんは今必要とされる知識や技術を学び（Trend）、志を共する仲間と情熱を持ち（Passion）、より良いプログラム構築の感性を磨く（Originality）機会を得られるものと思います。

アウトドアでの指導に少しでも興味のある皆さんには、ぜひこの講習会に参加して素晴らしい機会を得ていただけることを願っています。

● 西島 大祐［にしじま だいすけ］
鎌倉女子大学短期大学部 准教授

1976年生まれ、神奈川県出身。日本体育大学卒業、玉川大学大学院修了。大学在学中に野外教育と出会い、OBSのウインター・ジャルト（冒険教育指導者養成課程）を修了。現在も野外教育の研究と実践に励んでいる。WEAアウトドア・エデュケーター、LNTマスターエデュケーター、キャンプディレクター1級などを所持。

アイオレシートの紹介
NO.5 ミクロな世界みーつけた!
荒牧 未来

今から12年前、初めてアウトドアゲーム指導法講習会に参加しました。講習会では、創作ゲームの時間があり、そこではチームに分かれて、その場でゲームを作っていきます。自分たちで試行錯誤して生み出したゲーム達は、どれもこれも不思議と愛着が沸くのです。

今回紹介させていただくことになった『ミクロな世界みーつけた！』も、アウトドアゲーム指導法講習会の中で、誕生しました。

当時、私は保育園に勤めており、日々子ども達と過ごしていく中で、子どもの想像の世界の楽しさを感じていました。そして、そんな想像の世界を共有しながら、楽しめる活動を作ってみたい！と思ったのです。

公園や、森の中に遊びに行くと、「これなぁに？」と色々なものを見つけて来る子ども達。「これは、もしかしたら、“こびと”の靴かもしれない！！」なんて言えば、たちまち“こびと”の痕跡探しが始まります。少し、想像の世界に足を踏み入れれば、いたるところに“こびと”の痕跡が見えてきちゃうのです。

そんな日常の遊びをヒントに、どうやったら一つの活動として形になるかと考えて、作りました。

『ミクロな世界みーつけた！』は、自然の中の“こびと”の痕跡を見つけるという活動です。この活動で一番大切なことは、みんなで同じイメージの世界に入ること。それが出来れば、後は準備も特にいりません。

イメージを共有するきっかけとしておススメな絵本が、『じっちょりんのあるくみち』（作かとうあじゅ　文溪堂）です。この本は、じっちょりんという“こびと”が、街中を探険しながら、タネを蒔いていくというストーリーで、これを読んだ後は、「あ！じっちょりんがいる」と、じっちょりん探しが始まるのです。

そうしてみんなが“こびと”のイメージを共有したところで、「“こびと”の痕跡を、みんなで見つけてみよう」と探してみたり、「こびとの乗り物」「こびとの服」「こびとの住処」「こびとの食べ物」など、お題の物をチームごとに探したりと、活動につながっていきます。

また、こびとの街を作ってみたり、ストーリーを作ってみたり、他のチームが見つけたものは何なのか当ててみたりと、どんな遊びに展開できるか、考えるだけでわくわくしてきます。

活動が終わった後も“こびと”の痕跡が見えてきてしまうのも、不思議なところ。その場の環境や、参加者によって幅広く遊んでいけるので、ミクロな世界を通して、自然への興味関心が広がってくれたら嬉しいです。

「こびとの船みつけたよ！」

● 荒牧 未来［あらまき みく］
遊び塾はらっぱ　スタッフ

1986年千葉県生まれ。淑徳大学社会学部社会福祉学科卒業。在学中は野外教育学研究室所属。

卒業後は、保育士として10年勤め、現在は 遊び塾はらっぱ の専任スタッフとなる。

☆ 気づきの教育を促す体験活動 ☆

チームビルディング

村尾 政彦

国立那須甲子青少年自然の家で開催されたIORE講習会に参加させていただきました！

私は2004年に会社を退社しスポーツの持つ教育的価値を通じて「社会を生き抜く力を育みたい」という想いだけで「人材育成・チームビルディング」を柱とした事業で独立しました。

プログラム作成に試行錯誤・没頭していました時に、大学時代の親友から信州大学に野外教育という分野があると話を聞き、12年前に初めて参加したIORE講習会で「これだ！」と胸が高ぶったことを今でもカラーで描けるほど覚えています。

どれだけ素晴らしく高価なプラグラムだったとしても「参加者の主体性」を引き出すことができなければ期待効果は半減し、講師の自己満足だけで終わってしまう…。この講習会で野外教育のスタンスと出会えたことが私にとって大きな転換期となりました。

野外教育には「楽しさ」「達成感」「問題解決プロセス」その全てを繋ぐ「コミュニケーション」力を醸成する要素が詰まっています。

人と人とのかかわりの中で最大限のパフォーマンスを引き出す。共に達成感を味わうことによる帰属意識の醸成や改善プロセスを体験する中で気づき力が促され、

① 目的の共有化
② 役割と責任の明確化
③ お互いを尊重できる関係性

等、チームの要素が育まれやすくなると考えます。

国立那須甲子青少年自然の家

今回も初めてお会いする方々とチームを組み、アイスブレイクに始まり、課題解決型・創造イメージ型・自然体験型・自然学習型と各カテゴリーのアウトドアゲームを体験させていただきました。まだ初めてお会いして2時間なのに（汗）意見を出し合え、はたまたいじり合え（笑）…。

ゴール（問題解決）へ向けてという共通の目標が持ちやすいこと、自然の中で身体・五感を使う活動であることも、関係性を深める上での大きな要因と考えます。

最後の平野先生の「主体性をもって参加できるから楽しい」というコメントが刺さります。えてして我々は「教えなければならない」という責任感・義務感から、自らの「行動変容」を促すとう教育本来の目的を忘れがちになります。

自己理解・他者理解を深め、「違いを受け止める」からスタートできれば、もっと心の豊かな社会になっていくと信じています。

野外教育には想いをカタチにしていくために必要な想像力・発想力・コミュニケーション力・問題発見力・問題解決力といった「社会を生き抜く力」を育む要素が詰まっています。

今回改めて講師陣の皆様の楽しまれている姿から、だからこそ、参加者も楽しめるのだということを強く感じました。

関係する皆さまへの感謝の想いとともに、自分もできる範囲でこの活動を広めていきたいという想いが強くなりました。～感謝～

● 村尾 政彦［むらお まさひこ］
株式会社ドリームビレッジ 代表取締役

1971年神戸市出身。東海大学卒業後に大手外食チェーン店で店長・エリアマネージャーを経て人材開発（採用/教育/人事制度）に関わる。

2004年にスポーツを通じた人材育成を柱として独立。横浜商科大学、神奈川大学、関東学院大学で非常勤講師を務めながら、スポーツチーム・企業の社員研修／チームビルディングなどを軸に、神奈川県相模原市を中心に活動中。

アイオレシート（IORE SHEET）の衝撃！

和田 雅彦

学校では、小学校が2020年度から、中学校では2021年度から新しい学習指導要領がスタートします。

平成29年に告示された新しい学習指導要領は、主体的・対話的で深い学びを目指していますが、体験学習に関してもその重要性が一層はっきりと示されました。

「特別活動」の解説では「第３章」で「宿泊を伴う行事を実施する場合は、その環境でしか実施できない教育活動を豊富に取り入れるように工夫する。　（途中省略）

また、集団宿泊活動については、よりよい人間関係を形成する態度を養うなどの教育的な意義が一層深まるとともに、いじめの未然防止等や不登校児童の積極的態度の醸成や自己肯定感の向上等の高い教育効果が期待される。（以下省略）」と記されています。

このことは子どもたちの成長にとって宿泊を伴う行事、すなわち体験学習がなくてはならない最高の学びの場であるということを示しています。

私は茨城県で50年の歴史をもつ青少年教育施設「茨城県立中央青年の家」に勤務しておりました。

ここは正に毎日が体験学習を司る学びの場です。自然豊かな水郷筑波国定公園の中、筑波山系の「竜ヶ峰」の中腹にあり、宿泊定員は約200人の小さな施設ですが、稼働率は高く、年間４万人もの利用者があります。

私が今回この「アウトドアゲーム指導法講習会」に参加しようと思ったのは、「体験活動」をさらに充実させるためのヒントと、「よりよい人間関係を形成する」ためのノウハウを期待してのことでした。

期待と緊張の中、久しぶりの那須甲子青少年自然の家で開講式が終わるとすぐさまアイスブレイクが行われました。指導者のよどみのない話術とタイミングであっという間に参加者同士に笑顔の輪が広がると、もう後はすべてが楽しい充実した時間でありました。

また、参加者の年齢層も意外と高く、他の団体や大学の授業等で教えている指導者の方もたくさんいて「私はこの講習会だけは普通の参加者として参加したいの！」などと言う声に、私も大賛成でした。

次に行った「アメーバ」等のアクティビティも大変楽しく勉強になるものばかり。さらに夜、真っ暗な中で「闇夜のお絵かき」を体験したときには、「これだ！」と叫びたいほど感動しました。

衝撃的だったのは、これらのゲームがすべて「IORE SHEET」に簡潔にまとめられていることです。活動の概要、準備するもの、活動の手順など、これさえあれば仲間づくりは大成功間違いなし、「一生の思い出」となる体験活動になると確信しました。本当に楽しく充実した講習会でした。

最後に、私たちのグループが創作したゲーム、「木っと見つかる」が新しい「IORE SHEET」に採用されますことを切に願って…。

素晴らしい体験学習をありがとうございました。

講習会場のシンボルツリー：大きな赤松

● 和田 雅彦［わだ まさひこ］
茨城県立中央青年の家：前管理事務所長

愛媛県宇和島市御五神島における無人島生活体験事業をはじめ、茨城県県南フロンティアアドベンチャー事業や茨城県元気っ子体験村事業等に関わり、野外活動指導者としての経験を積む。

青少年教育がライフワークであり、現在は野外活動指導員及び思春期保健相談士（上級）として、子どもたちと関わりを続けている。

「下見が一番楽しいんだよね」

野口 和行

私に下見の大切さと楽しさを教えてくれたのは、大学時代の恩師です。

大学の専門科目として行われていた「野外活動」の授業では、大学2年生を対象に3泊4日の日程で夏休みに群馬県でキャンプ実習を行っていました。そのキャンプ実習は、OBや大学院生、学部の3、4年生がスタッフとして実習の運営に携わっていました。

毎年6月にはスタッフ全員で下見に行きます。病院の確認、いつも買い出しをしているお店への挨拶、登山やロッククライミングなどのプログラム実施場所の下見、実際にキャンプ場にも1泊します。恩師は当然のように、そのすべての場所を実際に見て歩きます。夜はスタッフみんなで飲み、食べながらリラックスした時間を過ごします。

OBから下級生まで、世代を超えて、さまざまな話題で盛り上がります。昔の山の歌から、最近のキャンプで歌われるようになった歌まで、たくさん歌を歌います。私はその時間が大好きでした。

瀬戸内海の島にある青少年施設で、恩師と一緒に大学生を対象としたキャンプをしていたことがあります。シュノーケリングをしたり、ヨットを楽しんだり、シーカヤックに乗って遠征に行ったり、という海を思う存分楽しむというプログラムでした。

初めての下見は、交通手段の確認、施設との打ち合わせから、プログラム実施場所とその周辺も含めた綿密な下見、予想されるリスクのチェック、

浜辺のベンチの前に広がる海

緊急避難場所や緊急事態が起こったときの対応など、安全に楽しく海を楽しむためにすべきことは本当にたくさんあります。

しかし、一番「下見」したのは、「海の楽しさ」でした。海の活動を専門とするスタッフと恩師、私の3名で、浜辺を歩き、シーカヤックに乗り、宿泊施設前、遠征先、とにかくいろいろな場所で海に入りました。恩師は海が大好きです。時間があるとマスクとシュノーケル、フィンを持って、海に潜っていました。最後に海から上がってくるときには、腰につけた袋の中にたくさんの「お土産」が入っていました。

夕暮れ時には、缶入りの飲み物を持って浜辺のベンチに行きました。「カシュッ」と開けて、ゴクゴクと喉を潤しながら、特別な時間を過ごしました。施設の人には、「もう下見するところないんじゃないですか？」と冗談半分に言われました。我々は「安全のためには絶対に必要なことですから」と言ってはいましたが、恩師がそのベンチで決まってこうおっしゃいました。

「下見が一番楽しいんだよね。」

● 野口 和行［のぐち かずゆき］
慶應義塾大学体育研究所 教授

野外教育情報　2019 第10号　　令和元(2019)年7月15日発行

発行所　公益財団法人　日本教育科学研究所
Japan Institute of Scientific Research for Education
〒104-0045 東京都中央区築地1丁目12番22号 コンワビル 5階
TEL. 03-6278-7761 ／ FAX. 03-6278-7683　http//www.zaidan-kyoiku.or.jp/

印刷所　株式会社サンワ
デザイン＝寺澤彰二

編集委員　野口和行、中丸信吾、金山竜也、鎌田晴美（自然体験活動推進委員会 機関誌・情報部会）